A．新生児乳児早期心疾患の診療実態に関する研究報告，および診療のガイドライン

報告責任者：高　尾　篤　良（分担研究者）
文　　責：中　沢　　誠（東京女子医科大学）

A—I　緒　　言

現在わが国における新生児死亡率は世界的にみても極めて低く保たれている。しかし，平均出生時余命が男女とも80年に近づいている今日，新生児期の僅か1ヵ月間の死亡率は，他の年齢域では考えられない程高いことも，ゆるぎない事実である。その死亡原因についてみると，種々の先天奇形が多く，とりわけ心奇形が重要な位置を占めていることは，本研究のなかでの新生児センターの統計にも示されている。先天奇形の発生予防への道のりはまだ現実のものとはならないことを考えると，これら発生したものを適切に治療育成してゆくことが，現時点における課題である。

新生児心疾患の医療は，個々の個別的努力によって，いくつかの地域でセンター化がすすみ，それらの施設においては治療成績の向上がみられている。しかし，それらの診療圏は全国的な視野からみると，まだほんの一部にすぎず，わが国の多くの新生児は，適切でかつ不偏な医療の恩恵を受けていないのが現状である。この点において，システム化のすすんだ欧米に比べて，甚だ劣っていると言わざるを得ない。

この立ち遅れの解消には解決すべき多くの問題がある。その第1にあるものは，新生児医療に携わる全ての人達が，疾患の存在を認識し，それぞれに対する治療効果および予後を知ることである。それによって早期発見の重要性が理解される。新生児期に発症する疾患はその症状・徴候が非特異的なことが大きな特徴ともなっており，従って心疾患の発見・診断も時として極めて困難なことがある。現在わが国において，新生児を扱う者の全てが，新生児期の心異常を発見する最小限かつ充分な知識と経験を有しているとは考えられない。また，発見されても全てに適切な医療が施されているとも考えられない。

一方，年間出生数は将来150万人程度に落ち着くとされている。先天性心疾患発生率（頻度）は1％前後であり，これは将来減少することはないと考えられる。すなわち，わが国では年間1万5千の先天性心疾患児が出生することになり，これは決して少ない数字ではない。これらのうち乳児期に要医療となるものが1/2ないし2/3であり，その実数は約1万名に達する。

米国では，1968年から，ニューイングランド地区の六州で，infant cardiac program……新生児乳児心疾患のよりよい医療を目指したプログラム……が行なわれている。チアノーゼと多呼吸によって発見された心疾患児は，専門医のコンサルトを経て専門病院に移送されるシステムがつくられ，その結果，それらの患者の早期発見と治療成績の向上がみられている[1]。

以上のごとき現状と将来から，新生児医療従事者の心疾患発見診断への努力と熱意によって，心疾患による死亡・罹病が減少すると期待される。そこでここに，心疾患発見のための基本的事項，心疾患の可能性を考えた場合にチェックすべき事項，専門医に電話で相談するためのチェックポイント，重症心疾患児を専門施設へ転送する場合の注意点，などをまとめた。そのなかで，今日の新生児乳児心疾患医療の現状を知ってもらう目的で，一部多少専門的な内容にも及んでいる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

以上のごとき現状と将来から,新生児医療従事者の心疾患発見診断への努力と熱意によって,心疾患による死亡・罹病が減少すると期待される。そこでここに,心疾患発見のための基本的事項,心疾患の可能性を考えた場合にチェックすべき事項,専門医に電話で相談するためのチェックポイント,重症心疾患児を専門施設へ転送する場合の注意点,などをまとめた。そのなかで,今日の新生児乳児心疾患医療の現状を知ってもらう目的で,一部多少専門的な内容にも及んでいる。